

「かわいそう」という言葉

学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校三年 樋口 温彦

僕が幼稚園に通っていたときのことでした。夏に恒例の宿泊行事が行われました。それまで家族以外の人と宿泊したことがなかったので、僕はとても不安で緊張していました。宿舎についてからもずっと緊張していて、夜もよく眠れませんでした。

二日目に、同級生全員でスイカ割りをするようになりました。僕はスイカを上手く割ることができたのか、よく覚えていませんが、その後のことはよく覚えています。割ったスイカをみんなで食べるようになりましたが、僕は食物アレルギーがあり、スイカにも注意が必要で食べることはできませんでした。そこで、勇気を出して担任の先生に、

「僕はアレルギーがあるので、スイカを食べなくてもいいですか。」
と、言いました。すると、それを聞いていた別の先生が、

「スイカも食べられないのか、かわいそうに。他の子はみんな食べられるのに。」

と、言っているのが聞こえました。周りを見ると、僕以外の同級生は、話をしながら楽しそうにスイカを食べていました。同級生でスイカが食べられないのは僕だけでした。「かわいそうに」その言葉を聞いて、僕は悲しくなりました。それと同時に、僕が一人だけスイカを食べないのはいけないことのように思い、

「やっぱり大丈夫です。」

と言って、スイカを食べました。僕は、とても不安な気持ちになりました。宿泊行事が終わり、無事家に着きましたが、スイカを無理して食べたからか、心の疲れからか、僕は熱を出してしまいました。宿泊行事は、僕にとっては苦い思い出になりました。

僕は、スイカを食べられないことに対して「かわいそうに」と言われ、とても惨めな気持ちになりました。僕はその時まで、食物アレルギーに注意はしても、自分をかわいそうに思ったことはありませんでした。食物アレルギーで食べられないものがあることは、仕方のないことです。それに対して「かわいそう」と言うのは思いやりのない言葉だと思います。

そして、僕が一番傷ついたことは、「他の子はみんな食べられるのに」と言わ

れたことです。その言葉は僕の中でくり返され、他のみんなはおいしそうにスイカを食べられているのに、僕だけ食べられないのはおかしいと言われているように思えてきました。とても孤独な気持ちになり、「僕も食べなければ」という焦りの気持ちが心の中いっぱいに広がってきました。今考えてみれば、アレルギーの食べ物を食べることは、命に関わってくることなので、とても危険なことをしたと思います。僕の場合は、アレルギーの程度が軽く、大事には至りませんでした。無理して食べたことで体調を崩してしまうこともあると思います。

アレルギーがあることも、自分一人が食べられないことも「かわいそう」なことではないと思っています。だれでも何か一つは苦手なこと、自分ではどうにもできないことがあると思います。この体験から九年が経ち、今年は日本でオリンピックやパラリンピックが開催されるなか、多様性という言葉をよく聞くようになりましたが、人と違うことを認め合うのは、深いところでは、難しいこともあると思います。しかし、これからの僕たちは、未来に向かって、苦手なことを無理して埋めようとするのではなく、お互いに分かち合っていけたらと思っています。